
夏の戦争

rutu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の戦争

【Nコード】

N4272E

【作者名】

r u t u

【あらすじ】

異様な戦争がはじまった。子供がけしかけた大人との血で血を洗う戦い。彼らの目的は一体何なのか？

第一話 子供

降りしきる血の雨。一日の戦闘で完全な廃墟と化したまち。

兵士達は痛み、恐れ、そしてなにより、身を裂かれるような罪悪感に襲われていた。

ふと部隊長の河藤はうつろな眼で占拠した建物の窓から外を見た。

道にはバリケード、破壊された装甲車があり、そのまわりにはいくつもの死体が転がっている。

自分の仲間達も含まれているのだが、多くはブレザーやセーラー服に防弾ジョッキを着ている。

そう、敵は子供だったのだ。

自分も同じような年頃の子供をもつ兵士たちは彼らを殺した。

殺さなければ殺される

だが、河藤はこの戦争に疑問を抱いていた。

「どうして子供を殺さなければならなかったんだ。」河藤はつぶやいた。

「殺さなければ、殺される。」河藤より年上で、膨れ顔の副長の山田が少しふっ切れたように言った。

「それはオレも思ったが、それは事後論でこんな戦争必要なかったのではないか？」

警戒のためにいつでも発砲できる状態の小銃を山田は置いて言った。「俺達は国を守る軍隊だ。国の命令は絶対だ。それにケンカを売ってきたのは相手だろ。勝手に独立して、勝手に戦争をはじめた。罪には罰だ。ガキだろうと関係ない。」

そういえばこいつは独身だった。

この戦争のはじまりは、ある地方の高校の生徒、職員全員がその山間にある町を武力で占拠し独立を宣言したことだった。

国は揺れた。なんとか話し合いで解決しようとする人を送りこんだが、校門で射殺された。

国は国民の安全を第一に考えるとし、特殊部隊を送りこの戦争をはじめたのだった。

それにしてもなぜ彼らは独立なんかしたかったのだろうか。

河藤は山田の言った軍隊を自衛隊に訂正した。

「まあ、あまり、考え過ぎないこつた。隊長はそこそこ悪い癖だ。

」

「私達は自衛隊として初めて人をあやめました。私は五人もの学生達をこの手で……うう。」突然、部隊の唯一の女性、藤川が泣きながら言った。

彼女はこの部隊で一番苦しんでいた。

河藤は言った。

「俺も十人の生徒、教師を撃つた。鮮明に覚えている。中でも、最後のふたりはつき合っているようだった。動かない片方にずっと身をよせ泣いていた。」

藤川はさらに泣き出した。

「隊長、だめでしょ。」と山田は藤川を慰めにいった。

藤川の泣きじゃくるのを背に河藤はさらに考えこんでいた。

生徒は本当に独立なんかしたかったのだろうか、教師がなんかを吹き込んでいたのか。

ふと、耳をすませる。

けたたましい銃声の合唱も遠くなり、数を減らしていた。明日には

敵の本拠地、北伊ダムに攻撃が加えられ戦いも終るだろう。

そう、考えていた河藤はふと気づいた。藤川の泣き声や、山田の聲が聞こえない。

河藤が振り向くより先に首筋に鋭利な刃物があてられた。

「殺される前に殺せ。」

少し笑みをふくんだその声は。明らかに子供の声だった。

つづく。

第二話 学校

わたしには家族がいて、彼氏がいて、友達がいた。

小中学一貫の学校に入り、成績も良かった。

みんなわたしをほめてくれ、わたしも本当にうれしかった。

幸せな普通の生活を過ごしていた。

もっと、このときが長く続いて欲しかった。

ただ少し刺激が欲しかった。

親友にそんな話をしたら。友達は特效薬をくれた。

S

あたまがすつきりして。やめられなくなった。

それがなければわたしはわたしじゃないような気持ちになった。

わたしは壊れた。

ウリ、ヤク、万引き、生活はすさんだ。

当然サツにパクられた。

そして、わたしはすべてを失った。

ヤク絶ちは想像を絶するほどつらかった。

わたしは反省をした。本当にいけなかったと。

そして、わたしはもとの生活には戻れなかった。

社会にとっての異物。学校は退学になっていたし、友達とも連絡がつかなくなっていた。つらかった。

でも一番つらかったのは最後まで信頼してくれている家族に疎まれたことだった。

わたしは泣いてあやまった。

だが無駄だった。
わたしは拒絶された。

タクシートの運転手が、「目的の場所についた」と外をじっと見つめて全く降りる気配のないわたしにすこし大きな声で言った。

何回か繰り返していったようだ。

わたしはハンドバックをひとつ手に持ちタクシーを降りた。

タクシートの運転手はわたしの目の前にある森のなかに続く白い道の先に見える建造物を指を指し

「あそこが学校ね。」と言った。わたしは何も言わず歩き始めた。

わたしは歩き続けた。ここは町から少し隔離されているようだった。一面のみどり。

しかし、見えていた建物の門の前まで来て。景色は様が変わりしだした。

建物は以外と大きく、五階建てが三棟。グラウンドが一枚。それを一周白い有刺鉄線のついた塀がかこんでいるのだった。

だれも逃げられないように。

校門の前には一人の中年の男が笑みを浮かべなら立っていた。

「黒鉄山高校へようこそ、黒崎悠奈さん。」

わたしはへらへらしながらもどこか芯のあるその男をスルーした。

しばらく歩き続けて、わたしは時計台をみつけた。

真っ白な校舎に不似合いな真っ黒な時計。

それをわたしはにらみつけて言った。

「このせかいよしにせらせ。」

わたしはわるくないわるいのはこのせかいだ。

それがわたしの行き着いたAnswer。

(data)

国立黒鉄高校。

生徒数

283名

職員数40名

補足

一般入試はなく一般にはほとんど知られていないが、素行が悪く、程度によらず事件をおこした子供に更正目的で入学資格が与えられる。ただし入学するかどうかは本人の意思は関係なく、保護者が決定し、入学した本人は卒業するまで、一定の制限が義務として与えられる。

第三話 ナイフは持ち込まれた

ナイフを振り回した。

カチン

硬い音がしてはじかれる。
くるりくるりと回転して

サク

自分のふとももに突き刺さる。

そして急に意識が遠のいていく。

空へ高く高く上がっていた。

冷たいよるの宇宙に漂う体。

ふと、気配を感じたので視線を反らすと、幾千もの赤い、殺気を帯びた眼がある。

手元に置いてある銃を手に取り引き金を引くモーションに入る。
慣れた手つき、もうこいつらはにげられない。

だが、気付く。俺はこいつらをみたことがある。

自分の国の紛争で。

学校に籠城していた、敵の残党だった、少年兵たちだ。

かれらは学校をつまく利用し要塞と化していた。

三ヶ月の善戦。予想外の痛手を負った自国。そこで俺が投入された…

急に視界が暗くなり、自分の体が地面に向かって落ちていく。

リリリリ。ジリリ。バチ。

目覚ましをとめた。

時計をみた。午前10時30分。学校の始業は8時30分。

「カンペキダ。」

カタコト。

鼻はよくとおり、髪はもじゃもじゃ。眼光鋭い、無精髭。顔はくろい。香水くさい。この国の人ではない。

かばんを取り出した。

教科書。ふでばこ。ノート。携帯。さいふ。ナイフ。をかばんに詰めこんだ。

彼は出発した。彼の存在理由を確かめるために。

平和な戦場に血のついたナイフを煌めかせるために。

この国の本心を知るために。

第4話ロストファイナーレ

雨が降り続ける。

雷が落ちた。

闇の中に浮かび上がる町並み。

廃墟。

並々ならない気持ち悪さを感じながらも。

40代半ば、禿げ上がった頭はその象徴であるように、ただどこか引き締まっている、新聞記者、町田さとしはじっと待ち続けた。

「本当にやってくるのだろうか？」

かれこれ約束の時間から2時間が過ぎようとしていた。

タバコに火をつける。

「火か…」

煙が取り巻く。あの時と同じか…

コンコンッ

コンコンッ

車窓を叩く音。

町田の浅い眠りをさえぎったのは目的の取材をする人物だった。

町田は窓を開けた。

「すまん。待たせたようだね。」

七十五歳にしては若々しい誠実そうな姿。

元内閣総理大臣山田洋二。

十年にわたる長期間政権を維持し、最後にあの事件の責任をとった人物だった。

彼は町田の車の後部座席に座った。

雨が窓に当たってはぜる音がさらにリアルになっていく。

長い沈黙を破ったのは後部座席に座った老人だった。

「私に取材というのは嘘だろう。」

町田は窓のそとをじっと見て、眼鏡を外した。

「ばれましたか。」

「いまはこんな立派な体になってしまいました。あなたに初めてお会いしたときは水泳部でずいぶんいわして体も引き締まっていたんですが。」

「田中亜紀君だね。」

「はい。あなたはあの時の真実を言わなくてはならない。」

「そして私を殺すか？」

血走る田中の瞳をじっと見つめながら老人は言った。

「では話そう。」

老人は今まで心にのしかかり負担であり（彼はずっと命の危険と隣り合わせの生活を強いられていた。）、またいつのまにか原動力となっていたものをすべて吐きだした

ずっとふけてしまっていた。

「わかったかな？ 私達は愚かだった。ただこれだけはむねにとめていてほしい。今の君なら分かると思うが私達と君達との違いは若さだけなのだ。」

老人は目をとじ膝を叩いた。

「さあ、ファイナルだ。君が指が白くなるまで握っているそのナイフで私を殺すがいい。それで君達が報われるのならね。」

田中自分を殺せと喚く老人を無理矢理下ろし、言った。

「あなたは確かに老いた。だけど俺ももう若くはないのだ。その話を聞ければ十分。あなたを殺した。」

田中は車を発進させた。つぶやく。

「みんな」

アクセルを強く踏みこむ。

「ごめん。」

「ユウナ」

目をつぶる断崖に突き進む車。

飛び立つ。

「最後に、自由を。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4272e/>

夏の戦争

2010年10月13日17時16分発行